は簡單になれば女中なぞは不用である。家庭内の生活の單純は家庭外に於ける公衆的任務に時間が捧げられる。

現在の主婦生活を十分に解剖してそれを合理化してゆく餘地はあまりに多くて殆どである。

結婚法はすたれる。男女の結合と分離とは單純化される。男女が極めて科學的になつてゐて感傷性の過剰はもうないからである。三角關係のもつれはない。と云ふのは女性が男性に經濟的隷屬がないとすれば女性は現在のやうな感情のこだわりがなくなつてゐて至極あつさりして來るからである。愛と理解とが相互に離れたときには解決がさして困難ではないしかし、一方に愛が離れて一方に愛が殘ると云つたやうな場合でも、唯物論的な考方と科學的な判斷とが兩性を支配してゐる時代だから兩性關係にも物理學の作用を認めて來る。

これは一人の友人が最近私にあてた手紙だが「戰爭が腕力戰、機械戰、化學戰、理學戰と云ふ發展段階となつて、現在は毒瓦斯、戰車等の化學戰の時代です」と云つて來た。兩性問題の解決は曾つては腕力戰であつた。それから制度的（資本主義的の）なものとなつた。今では破型的な兩性は化學的な交錯を兩性關係に於いて示してゐるものもあるが、百年も後になると兩性關係が理學的になるであらう。それはゴットウィンの考方だが、理學的牽引を法律のバリケードで防いでゐるのが現在である。

情緒乃至感情で物事を測定する方法は百年後には全然廢たれる。愛が情緒で測られるのではなくて科學的な測定が加へられる。

結婚の披露なぞも紅茶一杯位で濟むだらう。と云つても僅か百年の後だからまだ〳〵人間がこれまでに持つて來た傳習がそう清掃されやうとは思はない。たゞ、幾分そうした方向に向いて來てゐるであらうと云ふに過ぎない。

百年後の社會相をデテールに亘つて描かかうとすれば、相當の枚數が要る。とてもこれ丈の紙數では盡くされない。で私はホンの一部分のスケッチをやつたのに過ぎない。今、幼芽を出してゐる諸の現象がどうなるか、無產政黨がそれまでに天下を取つてどんな社會主義的政策を執つてゐるか、社會の風俗はまたどんな形になつてゐるか、科學がどんなに進んで今から考へると想像も付かない設備が出來るか、日常生活の樣式がどんなに變つてゐるか、等々に就いても書けやう。百年と限定してそれがよしどんなに速力を加へても進化論的に見ればそんなに、まるで別な世界のやうにもならない。よしその間に突發的なことがあつてもとてもユートピア物語にあるやうにはならないにちがひない。私のこの記叙も少しく願望の色が勝ち過ぎてゐないでもないか。

兎に角、未來の豫測はむづかしいものだと泌々思へるのである。

醫學上より見たる百年後の人間

小酒井不木

一

百年後の人間はどんな有樣であるか？　明日のことさへわからぬ人間にとつて、百年後のことがわからう筈はないけれど、わからぬことであるだけ、それだけ、想像を逞うして見たくなるのが人間の常である。だからこれまで、未來の人類について書いた小說が度々發表され、中にも、エッチ・ジー・ウエルスの A story of the days to come. は名高いものだが、要するに、どれも皆、出鱈目であるといつてよい。だが、出鱈目であればこそ幸福で、若し本當に、未來のことがわかるやうになつたら、それこそ人間にとつては一大恐慌である。お互に「死ぬ日」がわからねばこそ、露命旦夕に迫つてもなほ且つ一縷の希望を持ち得るが、若し「死ぬ日」が本當にわかつたなら、恐ろしくて生きて居られるものでない。私は、幾年かの後に、すべての物を透視し得るやうな、レントゲン線に似た一種の放射線が發見され、それによつて、例へば、人體の內景を透視し、的確な診斷を下し得る日が來るにちがひないと思ふのだが、假りに、さういふ時節が來たとしたら病氣に罹つた場合には、むしろ診斷して貰はぬやうになりはしないかと思ふのである。實際、診斷が曖昧なところに、病

人の救はれる道があるのではあるまいか。

さて、醫學上から見て百年後の人間はどうなるかといふ問題であるが、かういふ問題は、これまで多くの人が試みたやうに、小說の形式で發表した方が一ばん面白いと思ふ。だが小說の形式で發表すると、同じく出鱈目を書いても、その出鱈目の程度が極端になるし、また相當に骨の折れる仕事であるから、私はたゞ尤もらしい理窟を並べることによつてこの問題を取扱はうと思ふ。

アリストテレスは、「將來のことを知らうと思はゞ、過去のことを十分研究すればよい。」といつた。この筆法から言へば百年後の人間の有樣を知らうと思つたならば、百年前に遡つて人間の有樣を研究すればよい譯である。まつたく、百年前から今日に至る經過をよく研究したならば、今日から百年後に至る經過は、凡そその見當をつけ得る筈である。とはいふものの、西暦二〇二七年に、物好きな人が古本屋の隅から本誌を見つけ出して、たま〳〵この文を讀んだならば、きつと腹をかゝへて笑ふにちがひない。その光景を想像すると、何となく擽つたくなつて、いつそ小說の形式で、大出鱈目を書いて置いた方が、同じく笑はれるにしても笑はれ甲斐があると思ふけれど、今更もう、どうにも仕樣がないのである。

二

醫學上から見た百年後の人間といへば、當然、百年後の「人體」といふことが問題の中心とならねばならない。けれども人間の身體が、僅か百年後に、それほど大きい變化を受けないであらうことは、百年前の人體を考へて見ればわかることである。扁桃腺や盲腸は人體に不用の器官であつて、而も病氣を起し易いから、それを取り除く手術が盛んに行はれるやうになることは疑ひ得ないが、だからといつて、百年後に生れる子に扁桃腺や盲腸が無くなつて居るとは考へられない。又、乘物の數が殖え、エスカレーター式の道路が發達して、ことに都市の住民は、脚を使はなくなるであらうけれど、それかといつて、百年後に生れる子の脚が、すつぽんのそれのやうに短くなるとは考へられない。いづれにしても、百年後の人體と今の人體との間に、これといふほどの形態的變化があらうとは思はれないのである。たゞ、女の髪の形に至つてはすばらしい變化があると思はれるけれど、それはむしろ服裝上の變化であつて、もとより肉體上の變化ではない。

たゞ百年後の人間で、最も目立つのは、眼鏡をかけた人と義齒を入れた人が非常に多いことである。ことに、それが青

年に甚だ多いことである。百年以前の人物畫で眼鏡をかけて居るのに出逢ふことは甚だ少なく、浮世繪の中に眼鏡をかけて居る男女を見かけることは、よく調べて見ないからわからぬが恐らく稀であるにちがひない。それが、百年後の美人畫などには、きつと眼鏡をかけた女が度々描かれるであらうと思ふ。又、義齒ことに金齒を入れる者がたしかに殖える。前齒など悉く金で、まるで獅子面のやうな女が、いやといふほど眼につくであらう。

醫學が發達して、不完全な器官を人工的に匡正するやうになつた結果は、益々その不完全を多くならしめる道理であつて、原始時代には、視力の惡いものも、齒の惡いものも、みな生存競爭の落伍者であり、從つて、自然淘汰の結果、視力のよい者、齒のよい者ばかりが殘つたのである。

原始時代には、今日のやうに齒を磨くといふことはなかつたらしい。それだのに彼等の齒は至つて健全であつた。現今の人々は齒を盛んにみがくにもかゝはらず、齲齒が甚だ多い。これは食物の性質の差異に歸すべきものではなくて、むしろ齒の榮養神經の不健全と義齒をはめるやうになつた結果に歸すべきものであらう。

知識の欲求が讀書を強ひ、その結果眼球の形狀を不整にし視力に異常を來すのは當然のことであるが、眼鏡によつて、その視力の異常を匡正するやうになつてからは、遺傳的に視力の異常者が多くなつた。後天的に得た性質が遺傳するか否かに就ては、ダーウィン以來議論のあるところであるが、後天的に得た性質でも、長い間同じことが繰返されて行つた場合には、遂には遺傳すると見て差支ない。視力の異常に就て言ふならば、少なくとも視力の異常を起し易い性質を遺傳することは事實である。

視力の異常のうちでも、潛伏遠視の如きは屢々神經衰弱の原因となるのであつて、神經衰弱はやがて各種の榮養神經の障害を起し、從つて齲齒も起り易い道理である。だから眼鏡と義齒とはその間に一定の關係がある譯であつて、百年後の人間には、眼鏡と義齒とがその附き物になるであらう。

三

このやうに、醫學の發達の結果は、その他の器官に於ても不完全な分子を人體に保存せしめ易く、百年後の人體は、現今の人體に比して、たしかにその質を低下するであらう。現今の醫學は、どちらかといふと、弱いものを救ふことに力が注がれ、強いものを作り出すことに比較的冷淡である。この

強いものを作り出す方の、いはゞ積極的醫學は、漸く最近になつて起つて來たのであつて、百年後の醫學は、よほど積極醫學に傾いては居るものの、まだ〳〵消極醫學から全然脱却し得ないであらう。

ことに人口の增殖につれて產兒制限が行はれ、その結果は却つて、人間の質を惡くする虞がある。といふのは、統計によると、通常長子次子には愚惡のものが多く、第三子以下に賢良なるものが多いのであるが、產兒を制限する際には、第三子以下を制限するであらうから、自然にその質は惡くなる道理である。又產兒制限は知識階級のものによつて行はれ易く、榮養不良の貧民は之を行はないであらうから、全體として、いよ〳〵劣惡な人間が殘ることになるのである。

人間の質が惡くなれば、神經衰弱、肺結核に罹り易く、ます〳〵人間の質は惡い方に導かれて行く。一方に於て、晚婚の風習が盛んになるにつれて、たとひ「獨身稅」の稅率が增しても、賣笑婦との交際は著しくなり、その結果黴毒が蔓延し、Civilization と Syphilisation は相も變らず並行して、人間を苦しめるであらう。

かう考へると、百年後の人體は劣惡極まるもののやうに見えるが、幸ひに積極醫學の發達によつて、體質の人工的改造が行はれるやうになり、疾病を未然に防ぐ方法が工夫されて人類の質の低下を幾分か阻止するにちがひない。

私は前號の本誌に、體質醫學に就て述べ、內分泌と體質との間に密接の關係あることを示し、なほ、今後は、內分泌腺を適當に處置することによつて體質を人工的に改造し得るやうになるであらうことを記したが、百年後には、レントゲン線の應用、又は、內分泌腺の手術的削除又は移植によつて、弱い體質を强くしたり、偏つた性質を眞直にしたりすることが盛んに行はれるにちがひない。

一方に於て、潛伏意識の研究が發達して、催眠醫學が隆盛を極め、催眠術によつて、內分泌腺の機能を適宜に調節し、レントゲン線や手術によらずして、體質を改良する方法も工夫されるであらう。現今の醫學は、主として肉體に關する醫學であるが、百年後には、精神に關する醫學がその中心となるであらう。さうして、精神の微妙なる作用が、疾病の治療と豫防とに應用されるであらう。

然し、體質の改造が人工的に自由に出來るやうになつた曉には、世に天才といふものが無くなるであらう。何となれば天才はいづれも偏つた性格を持つものであるから、その偏つた性格を治してしまつたら、折角の天才も凡庸な性質に化し

てしまふからである。百年後には、まだこの恐れはあるまいが、幾年かの後には、この世の中は凡庸な徒輩に滿ちることであらう。その結果は、野蠻時代に逆戻りするかも知れない自然科學の發達の跡をふりかへつて見ると、人智は今後、如何に恐ろしい發達をとげるか、まさにはかり知られぬやうに思はれるけれど、案外、今の世が、人智發達の頂點にあるかも知れない。

四

けれども、百年後は、きつと、今よりも人智は進んで居るであらう。醫學の方面に於ては、これまで發見されなかつた痘瘡、痲疹、猩紅熱の病原體も發見されて居るであらうし、所謂化學的療法も相當に進步して居るであらう。癌や結核の化學的療法は、百年後に於ても完成されるとは思はれぬが、急性傳染病のうちでもチフスの如きは、都市の上水道下水道の完備と共に殆んどその跡を斷つであらう。

食物を人造すること、卽ち、他の生物の力を貸りないで、人間の力によつて、人間の食物を人造することは、百年後には、よほど有望な程度に達するであらう。然し、空中の窒素から蛋白質が作られたり、炭酸瓦斯から澱粉が作られるやうになるのは、頗る忝いことではあるが、かやうな人造食物には味をつけることが頗る困難であらうから、あまり珍重されないかも知れぬ。又、折角消化管なるものが存在して居るのであるから、化學的に分子の小さい人造食物によつて、それをあまり使用せぬやうにするといふことは、案外、うれしいことではないかも知れぬ。人造食物は、人口增殖に對する一つの策畧であるが、人口が極端に殖えて、食物が無くなれば誰かの言つたやうに、共喰ひといふことが起つて、案外容易に人口は調節される筈であるから、人造食物の研究などにはあまり身を入れないで置く方が得策であるのかも知れない。この點、百年後の人々にも一寸御注意申し上げて置きたいと思ふのである。

最後に考へて置きたいことは、百年後に於て、現今見られぬ病氣が、あるか無いかといふことである。たとへば神經衰弱といふ名は百年前にはなかつた。だから、百年後には現今にない病氣が發生するかも知れない。たとへば、百年後に於ける電波の應用は、とても現今とは比較にならぬほど盛んなことであらうから、その電波が、人體に徐々に作用して一種の疾病を起し、それに「電波病」といふやうな名が附けられぬとは限らない。新らしい傳染病が發生することは一寸考へ

にくいことであるが、自然科學的知識の應用が、新らしい病氣を起すことはあり得べきことであらうと思ふ。現に空中の飛翔によつて、ある生理的變化が認められるのであるから、今後空中旅行が自由に行はれるやうになると、それに從つて一種の病氣が起り得ることも、想像するに難くない。

いづれにしても百年後の人體は、現今の人體とそれほどの變りはないと思ふ。神經が纖弱になることは爭はれないけれども、一方に於てそれを救ふ方法も講ぜられ、質の一般的低下は認め得るとしても、甚だしく劣惡な人間とはならないであらう。

社會醫學者たちは、人間の平均壽命の延長といふことを心がけ、統計的には平均壽命が延長するやうな傾向があるけれど、それは乳兒の死亡率を少なくし得たゞけであつた、大たいに於て、人間の壽命は短かくなるのが、その必然的傾向であらう。百年後に於ても、不老不死の方法を研究する人間は盡きないであらうが、長壽者は、今ほど澤山には居ないであらうと思ふ。それと同時に、その頃には、人間の生殖力の衰退があらはれるかも知れない。さうして、人口問題の如きはその方面から案外、容易にかたがつくかも知れない。

いや、何だか自分ながら、言つて居ることに條理が立たなくなつて來た。小説でなくても、やはり將來を豫言するのは出鱈目に終るものであるらしい。

（をはり）

東京市を頭に描きながら百年後の都市建築

佐藤功一

(一)

物を煮るための太古の陶壺は便利にして丈夫な琺瑯引きの鐵鍋に代つた。人を乘せて運んだ輿は快速にして堅固なオールスチールの自動車への路をとつた。其當初に於て極めて幼稚にして脆弱であつた機械は、時の進みに應じ幾多の過程を經て、近代的利便を基とする形態と近代科學に據る堅牢なる構造へ進化し來つたのである。

小枝を編んでそれを芯とした泥の家から鐵筋コンクリートの家へ、長い木材を架構とした木骨の家から鐵骨の家へと建築は變つて來た。即ち複雜にして巨大なる建築、地震强風等の外力に耐え得る建築、耐火的の建築を容易ならしむるに至つたものである。

此進路の軌跡のなす曲線を描出することに依つて、吾人は其曲線の將來への方向を知り、因て以て將來の建築趨勢を豫知し得べき筈である。

併し乍ら單に將來と言つてもそれは自ら時の永さに關係するものであつて、十年後の建築よりも二十年後の建築はより曖昧に、二十年後の建築よりも五十年後の建築は更に曖昧に、百年後の建築は五十年後の建築よりも一層模糊として居る。